

来日した英国人鉄道技師の経歴と貢献 ―技能形成、技術習得、 および技術伝播

The Careers and Contributions of the UK Railway Engineers Who came to Meiji Japan from the Viewpoint of the Technological Discipline, Practice, and Diffusion.

林田 治男（HAYASHIDA Haruo）

24名の技師（土木学会・機械学会加入者）が、鉄道部門の「お雇い外国人」として明治初期に来日した。彼らの経歴調査は、学会「入会申請書」「名簿・住所録」「追悼記事」を出発点にして、BMD（「出生証明書」「結婚証明書」「死亡証明書」）、Wills & Probates（遺言、遺産検認）、Census（国勢調査）個票、Post Office Directory（郵便住所録）、新聞・雑誌記事、University Calendar（『大学便覧』）などの英国側史料を駆使し、さらに『工部省記録―鐵道の部』や叙勲記録などの日本側史料により、ほぼ経歴と貢献を再構成できるようになった。

彼らのうち5名が Australia and/or New Zealand（豪州、NZと略す）での勤務経験がある。余談ながら、2名が引退後移住した（A.S. Aldrich は日本の NZ 駐在名誉領事を務めた）。

ところで、豪州と NZ には、Engineering Heritage（土木史学会）という学会があり、隔年で研究大会を開催している。そこで2015年12月 NSW 州 New Castle で開催された大会に参加し、”The Connection between Japan and Australia and New Zealand from the Viewpoint of Railway Engineers in 19th Century”という報告を行った。5+2名の日本と豪州・NZ での経歴・貢献を紹介しながら19世紀後半期の関係に光を当てた。報告後や Tea Break での歓談の折、突っ込んだ質疑を行い、いくつかの示唆を得ることができた。

大会終了後、SA 州 Adelaide に移動し、初代技師長 E. Morel を含む Port Augusta から北部への200マイルの鉄道計画に関する約10名の議会証言を見つけた。それ以前を含め、Morel が1869年6月～70年1月に SA で、何を目論み何をしていたのかを探ることができた。

2016年2月末から2週間余、Ireland と UK を訪問し、研究調査を行った。大学教育を受けた技師が4名いるが、その科目、内容、試験など調べた。University Calendar（『大学要覧』）により、技師としての基礎知識が習得できるような Curriculum になっていたことを確認できた。さらに、King's College, London の場合、成績簿も閲覧・撮影でき、学業成績と技能との関連を考えることができた。日英における大学教育の評価を加味して、「技師と大学」の側面から考察できた。

なお昨年度中には、10月に鉄道史学会（近畿大学）、12月に EH で報告を行った。

大学からの研究費補助を得て、上述のような調査・研究が進展していることを最後に述べておきたい。